

宿題を忘れた罰！おちんちん丸
出しで廊下に立ちなさい！

都内のとある名門私立中学校の2年B組の教室は、数学の授業が終わったばかりのざわめきに満ちていた。机の上には教科書やノートが散乱し、誰かが落とした消しゴムの欠片が床に転がっている。生徒たちは友達と笑い合ったり、鞆に荷物を詰めたりしていたが、その喧騒は、担任の山本先生の鋭い声によって一瞬にして途切れた。

「佐藤、こちらへおいで」

山本先生の声は低く、どこか冷たく響く。教卓に立つ彼の背筋はピンと伸び、メガネの奥の目はまるで獲物を捉えた猟師のように光っていた。佐藤悠斗は、教室の後ろの席で友達と話していた手を止め、ゆっくりと立ち上がった。ズボンのポケットに手を突っ込

んでいた指先が、汗で湿っているのに気づいた。

悠斗は教卓に向かって歩きながら、クラスメイトの視線を感じた。左側の窓際の席で、いつも明るい笑顔の松本彩花が、不安そうに彼を見ている。彼女の長い黒髪が、陽光に照らされてつややかに揺れていた。右側の席では、クラス一のムードメーカー、小林真由がノートに何かを書きながら、ちらりと悠斗を見上げた。真由の丸い目は、どこか心配そうに揺れている。後ろの席では田中健太が「何だよ、また佐藤か？」と小さく呟き、眉をひそめた。

「佐藤、宿題はどうした？」

先生の声は、まるで冷たい水がかかるように教室に響いた。悠斗は教卓の前で立ち止まり、うつむいたまま、「す、すみませんでした... 忘れました」と答えた。声は震え、喉の奥で詰まるようだった。昨夜、オンラインゲームに夢中になり、数学の宿題のこと

など頭から消えていた。後悔が胸を締め付け、心臓がドクドクと鳴る。昨日、ゲームのチャットで友達と笑い合っていた自分が、遠い過去のようにだった。

「忘れた、か。2回目だな」

山本先生はゆっくりと口角を上げ、ため息とも嘲笑ともつかない音を漏らした。メガネのレンズが光を反射し、悠斗にはその目が見えない。だが、その視線が肌を刺すように感じられた。クラスメイトたちのざわめきが再び始まり、誰かが「また佐藤だよ」と囁く声が聞こえた。悠斗の耳が熱くなり、顔が火照る。首筋に冷や汗が伝い、制服の襟が肌に張り付く感覚があった。

「ルールは知ってるな。宿題を忘れた生徒には、罰がある」

悠斗の心臓が跳ねた。山本先生の「罰」は、ただ厳しいだけではない。どこか異様な執念を感じさせるものだった。以前、宿題

を忘れた生徒が校庭を10周走らされたり、教室の前で一時間立たされたりした話を思い出す。だが、今日の先生の声には、いつもと違う艶めいた響きがあった。まるで、悠斗の反応を楽しんでいるかのように。

「廊下に立ちなさい。全裸で」

その言葉は、教室に冷たい風を吹き込んだ。一瞬、誰もが息を止めた。悠斗の頭は真っ白になり、耳鳴りが響く。「え...何ですか？」と掠れた声で聞き返すと、先生は目を細め、「冗談じゃない。服を全部脱いで、廊下に立つんだ」と繰り返した。声には有無を言わさぬ力が込められ、悠斗の膝がガクガクと震えた。

教室がざわめきに包まれる。後ろの席の男子、斎藤亮が「うそ、マジで！？」と叫び、笑い声を上げた。窓際の彩花は目を大きく見開き、手で口を覆う。彼女の頬がわずかに紅潮し、指先が震えているのが見えた。真由はノートから顔を上げ、信じられないと

いった表情で悠斗を見つめる。彼女の目は潤み、唇が小さく開いていた。健太が「先生、やりすぎですよ！」と立ち上がり、拳を握るが、先生は「黙れ、田中」と冷たく一蹴。健太は悔しそうに唇を噛み、席に座り直した。

悠斗は「そんな...無理です...お願いします」と呟いたが、声はか細く、先生の耳には届かない。先生は腕を組み、「早くしろ。さもないと停学だぞ」と言い放つ。停学という言葉が、悠斗の心をさらに追い詰めた。両親の失望した顔が脳裏に浮かび、胸が締め付けられる。父親の厳しい声、母親の泣きそうな目。家に帰れなくなる恐怖が、悠斗の抵抗を砕いた。

「脱ぎなさい。今すぐだ」

先生の声が、まるで鞭のように悠斗を打つ。悠斗は震える手で、制服のブレザーのボタンに触れた。教室の視線が、熱を持った針のように肌に突き刺さる。指先が冷た

く、ボタンがうまく外れない。ようやく一つ目を外すと、ブレザーの内側のシャツが汗で湿っているのが見えた。彩花が「先生、やめてください...」と小さな声で呟くが、先生は聞こえないふりをする。真由は目をそらし、ノートに視線を落とすが、ペンを持つ手が震えている。

悠斗はブレザーを脱ぎ、教卓の横に置いた。白いワイシャツのボタンに手をかける。ボタンを一つ外すたびに、教室のざわめきが大きくなる。斎藤が「マジで脱ぐんだ！」と笑い、誰かが「やばいって」と囁く。彩花の目は涙で潤み、頬がさらに赤くなる。彼女は机に両手を置き、指をきつく握りしめていた。真由は顔を上げられず、ノートに意味のない線を何度も引いている。だが、彼女の耳が赤く染まっているのが、悠斗の目に映った。

シャツを脱ぐと、悠斗の細い胸板が露わになった。肌は白く、緊張で鳥肌が立ってい

る。肋骨がわずかに浮き、腹部は平らで、
へその周りに薄い産毛が見えた。教室の空
気が重く、視線が肌を焼くように感じられ
る。悠斗はズボンのベルトに手をかけた
が、手が震えてバックルが外れない。深呼
吸をしようとしたが、息が詰まる。ようやくベ
ルトを外し、ズボンのファスナーを下ろす。
カチャリという音が、やけに大きく響いた。